

# 源氏物語

と  
き  
が  
た  
り

村山リウ

主婦の友社

源氏物語ときがたり (下) 全三冊

定価 五八〇円

昭和四十三年四月十日 発行

著者 村山リウむらやま

発行者 石川数雄

著者との了解により、  
検印を廃止いたします

印刷所 明善印刷株式会社  
(オフセット) 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一の六  
振替 東京 一八〇番  
電話東京 (294) 二二二二 (大代表)

村山リウ

# 源氏物語

がとき  
たり

(下)

主婦の友社

|       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 橋     | 竹     | 紅     | 匂     | 雲     | 幻     | 御     | 夕     | 鈴     | 横     | 柏     | 若     | 若     |
|       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       | 菜     | 菜     |
| 姫     | 河     | 梅     | 宮     | 隠     |       | 法     | 霧     | 虫     | 笛     | 木     | 下     | 上     |
| ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... |
| 二〇天   | 二五    | 二六    | 二四    | 二七    | 二六    | 二五    | 三     | 二天    | 二七    | 二     | 五     | 五     |





若<sup>わか</sup>

菜<sup>な</sup>

上

藤裏葉でハッピーエンドに終わるかに見えた物語は、第二部若菜の巻にはいって、さらに局面を展開します。栄華と情趣生活の調和に物語の重心をおいて、ここまで書いてきた作者の目は、だんだん人生の深部に向いていき、人の世の矛盾、苦悩をまっこうからとり上げていくのです。

朱雀<sup>すざく</sup>の上皇は昨年末来、どうも気分がすぐれません。もともと若いときからご病身で、ご譲位後出家したいと思っていられましたが、例のうるさい母太后に妨げられて、その志をかなえることができませんでした。このかたのご在位中は右大臣や母太后の発言が幅をきかし、帝ご自身の意志で事を行なうことができませんでしたので、その点の不満は上皇におなりになってから、自由な趣味生活で補っておられたのです。あいにくなことに、このごろご病気がちです。ので、いよいよ念願の出家を決意なさいました。西山のほうにお寺まで建立して、隠栖<sup>いんせい</sup>の準備もできました。

ところがここに、出家を鈍らす問題が一つあるのです。上皇は東宮のほか、姫君四人の父君ですが、中でも第三内親王は目の中へ入れても痛くないほどのかわいがりようです。お年は十三、四。母君は藤壺の宮の腹違いの妹御で朱雀院ご寵愛の後でしたが、母弘徽殿<sup>こきでん</sup>太后が後援なさる臚

月夜ないのかみ尚侍の勢力に圧倒されて、院も遠慮がちな愛の表示をなされただけ、後も臘月夜の君に氣がねした宮中生活を送っている間に、姫君一人を残してなくなってしまうました。なき后への心残りは、その忘れ形見女三の宮への愛を深くしました。

ほかの姫たちと違って母君のない女三の宮は、父帝が手塩にかけて育てたので、ふびんがかかり、この姫をしっかりとした婿君にまかせるまでは安心できない。財産分けも女三の宮へは格別なご配慮で、なんとかよい婿君をとあせておいでです。

朱雀院のお心をお察しになった東宮は、母后しんこうきようでん承香殿女御といっしょにお見舞いかたがた上皇御所へいらっしゃいました。上皇は東宮が位についたときの心得をこまごまと注意してあげ、ついでに姫君のことをご依頼なさるのでした。

「女というものは、自分にそのつもりがなくても、周囲の者のしむけで、とんだ不運になることがあるものです。だからこそあなたに頼んでおきたいのですが、姫君たちがしあわせになるように氣をつけてやってください。それでも母のいるかたは母君にまかせれば安心だが、女三の宮には母もないし、しっかりとした親類もない。私の死後さぞたよりない思いをするだろうと思うと、そればかりが氣にかかってね。私ひとりをたよりにしているのですから、私にかわって姫のことを氣にかけてください」と、涙ながらにお頼みになります。

東宮はもちろんそのおつもりですが、母の承香殿女御にしてみると、自分などとはくらべものにならぬほどの寵愛を受けた女三の宮の母后のことを思うと、あまりいい氣持ちはなさらぬようです。そんなこんなで上皇はこの姫君の行く末を案じ、朝晩考えつめていらっしゃいますのでつい気分も重く、お体ぐあいも悪いのです。年末には御簾の外へもお出ましになれないほどになっ

てしまいました。最近物の怪などでときどきお臥せりのこともありましたが、こんなにづづいてお悪いと寿命も尽きるのかと、なおさら姫の縁組みのことを心配しておいでになるのです。

源氏の君も、たびたびお見舞いのおたよりをさしあげてご案じでしたが、ある日夕霧の君を名代としてお見舞いの参内をおさせになりました。父源氏からのお言づけを申し上げますと、帝は、

「桐壺帝のご遺言もあり、源氏の君によくしてあげようと氣をつけてはいたのですが、私がふつつかなため、在位中ああして須磨、明石へ流浪なさらねばならないような不しあわせな目にあわせしました。人間はどんなにできた人でも、自分を不幸にした者には恨みを持つものです。ところが源氏の君は私に対して、ちっともそんなそぶりもお見せにならぬばかりか、東宮のことについて心をこめて世話をしてくださる。ありがたいと思っているのですよ」と仰せになります。

「以前のことは存じませんが、私が成人いたしましたから話題に、父は昔の不幸など話したことはございません。ただこのごろは隠居してしまつたが、朱雀院ご在位中ご奉公を一心にと思ひながら、若年でもあつたし、器量もはかばかしくなくてお役に立つこともできなかった。これからこ体もひまになつたので参上して、昔話でもお相手したいと思つているのに準天皇などと窮屈なことになって、ついご無沙汰がちに過ぎて申しわけないと、よく話しているのでございます」と受け答えをしている夕霧の君は、まだ十八才ながらなかなかりっぱな若者です。その姿をじつと見つめて上皇は、

「あなたがまだ雲井雁と結ばれない間に、女三の宮のことを頼めばよかった。惜しいことです」などと仰せになるので夕霧は、姫君の配偶者の候補に自分をお考えになつたことがあるのだな、

とは気づきましたが、なにげない体でかしまっています。

源氏の君にもまさるおちついた夕霧の青年ぶりを見るにつけ、雲井雁に先を越されたのが残念な思いがなさるのでした。それにつけても上皇は、かれんではあるがたよりない女三の宮の、未熟な点を人目に立たぬように隠してくれ、一人前の婦人に導いてくれるような広い愛情の持ち主に姫を託したいものだと思いいなるのでした。

ある日、乳母の一人に上皇は、

「源氏の君がかつて紫の上を養育して、あれほどの婦人に仕立て上げたように、女三の宮を引き受けてくれる人はないものかね。冷泉帝ならあるいは、と思ってもみたが、あちらには中宮、弘徽殿女御など、錚々たるかたがおそろいだから、後援者もない姫が立ちまじっていくことはむずかしい。いつそ将来性のある夕霧にしようか……」とご内意をもらされるのでした。ところが乳母は、

「夕霧の君はまじめな青年ではございますが、雲井雁と結婚早々で水ももらさぬ仲と聞きます。とても他の女性に心向ける様子もございません。それより源氏の君はいかがでございましょう。あちら様はいつまでもお若い気持ちで女性への愛情は格別でございますから」と、しきりに源氏の君をすすめますので、上皇もなるほどそれも一案だ。女好きな源氏の性格は気になるが、また誠実さも格別な彼のことを思うと、親がわりとしてやっかいになり、源氏の誠意に甘えておまかせしようかと思いいなるのでした。

「なるほど、源氏の君のもとへなら、はなやかな生活を娘にさせたいと願う親は奉公させたく思うであらうな。人の一生といってもわずかなのだから、同じ暮らすなら源氏のように明るく愉快

に暮らしたいものだ。若いときのことだが、私が女に生まれていたら源氏とは仲よくしたいと思つたくらいだから……」とまでおっしゃるのです。

さて女三の宮の乳母の兄に左中弁を勤める者があり、彼は源氏にも信用がある男です。乳母はこの兄に、

「朱雀院は女三の宮を源氏の君にとのご意志がおりと拝察するのですが、この話、可能性があるでしょうか」と相談をかけました。すると左中弁は、

「源氏の君は幾人もの女君を六条院や二条東の院に住まいさせ、どなたにも誠実をつくしておいでです。しかしその中でも、断然他を抜いた愛情を受けていらっしゃるのは紫の上です。その紫の上と拮抗する女君となると、相当の人物でなければだめですね。しかし内親王様となると話はおのずから別ですよ。私は女三の宮のお人柄は存じませんが、ご身分の点では紫の上が及ぶことはありません。ただご本人の源氏の君に、いまさら結婚のお気持ちがおありかどうか。」

「身分もこれだけ出世すれば言うことはない。子どもたちもりっぱに結婚した。この世にもう望むことはないから、あとは出家でもしておちついた暮らしにはிரたいものだ」とおっしゃっていたこともありますからね。また冗談でしょうが、

「私は自分の良心にとがめることをした覚えはないが、女の問題だけは恨まれたこともあるので、女はこりごりだ」とも仰せになりました。しかし院がそれほど源氏の君にご執心ならば、この縁談を進める自信がないこともないのですが……。ということは、源氏の君の女君は、それぞれりっぱなご身分ですが、皆様臣下の出自です。したがって準天皇という高位の源氏の君の奥方として、雲上人がご降嫁になればそれこそふさわしいことではありませんか。もう一つ、葵の

上なきのち、源氏の君には正妻がおりでない。紫の上との結婚は内縁関係です。正妻に準ずる扱いを受けておいでになるだけのこと。源氏ともあろうおかたが、正妻なしではすみすまい。まさかこの話をいなどはおっしゃいますまい」

さすがは高級官僚、うまく盲点を突いて理づめで押していく道を考えつきました。これに力を得た乳母は、帝に吉報をお伝えするのです。朱雀院は、

御子達の世づきたる有様は、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際きわといへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなる事も、めざましき思も、自らうち交るわざなめれと、且は心苦しく思ひ乱るるを、また然るべき人に立ち後れて、頼む陰どもに別れぬる後、心を立てて世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかにて、世にゆるさるまじき程のことをば、思ひ及ばぬものと習ひたりけむ、今の世には、すぎずきしく乱りがはしき事も、類たぐひに触れて聞ゆめりかし。

「内親王は独身でいたほうが無難なわけで、ぜひ結婚させたいと望むわけではないのだ。いくら身分がよくても女というものは、連れ添う主人しだいであわせにも不しあわせにもなるのだから、結婚はさせまいと思ったこともある。しかし私が死んだあと、あの姫がひとりぼっちで独身を立て通していけるだろうか。昔の人は、身分のよい人は尊重して、けっしてらちを越えた仕様はなかったから心配も少なかったが、当節は行きすぎが多くて、少々好色的な世の中になったからね。となると、しっかりした婿に託しておいたほうが安全だと思い、婿選びに苦心するのだよ」

女三の宮にもう少し分別ができるまでそばにおきたい、とお思いになった朱雀院でしたが、そ

れでは出家もできないことになるので、とやかくと心を砕いておられるのです。

さて姫への求婚者はたくさんあるのです。兵部卿の宮、藤大納言、柏木などと。兵部卿の宮は女性関係がルーズで重々しさがないと選からはずされ、柏木は、若くて頭もよし、政治的な面でも芸術的才能もすぐれているから、いずれ将来の出世は有望であろう。人柄がおちついて理想も高く、まだ独身を通しているところはなかなか珍しいとは思われるのですが、今はなんとしても皇女の婿がねとしては位が低すぎると、どうやらお氣がすすみません。柏木は父太政大臣から、あるいは隴月夜尚侍を通じて、兵部卿の宮は弟御のよしみで、ぜひにぜひにと懇望されるので、院も困<sup>ま</sup>じ果てておられます。

なにしろご当人が実に未熟なので、父君の心配はたいへんなのです。姫の未熟さを承知したうえで、しかもよりよい人間に育ててくれる相手であってほしいと、なかなか無理な注文の婿さかしではあるのです。

あるとき東宮から、こんな手紙がまいりました。

「いろいろのお考えもございましょうが、源氏の君のようなかたにご依頼なさるのがよろしいのではありませんか」

これに元氣づけられて、いよいよ源氏に交渉してみることになりました。先日の中弁がお使者としてまいります。源氏の君は出家しようと思つていらつしやるので、

「結婚話などんでもない。私と朱雀院のお年と幾つ違うというのだ。それほど父君が行く末のことをご心配になる姫君を、私におまかせになったとて、私があと何年生き延びられるというのであろう。その点でも私は不適格者だ。いっそ冷泉帝はどうか。まだ男の御子もないのだから、

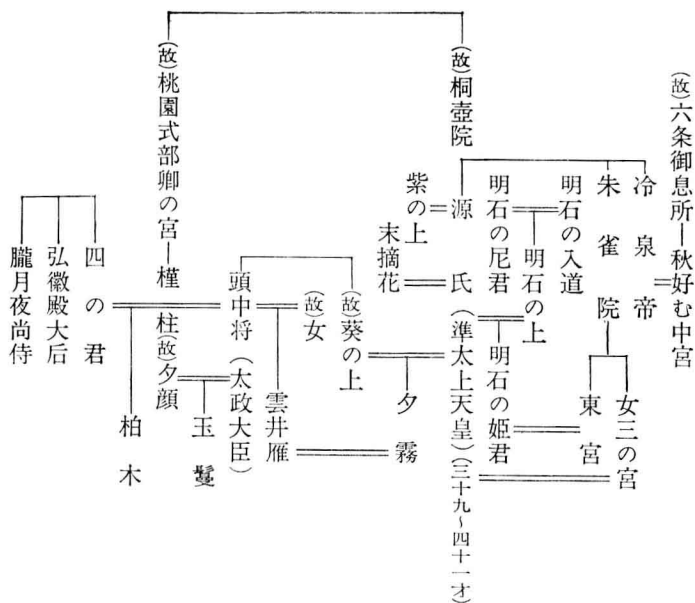
若い女三の宮がご結婚になったら、すぐにも御子が生まれるかもしれない。たとえ秋好む中宮や弘徽殿女御がいらしたところで、ご心配や気がねはいりません。というのは、藤壺の宮がよい例です。桐壺帝に最後にご参内になって、いちばん寵愛をお受けになり、その御子は今の帝になっていらっしゃるではありませんか」と申します。しかし左中弁は、すっかり瀬ぶみしたうえでの使者ですから、おいそれと引き下がるはずはありません。朱雀の上皇がたつてのご執心ですと、手をかえ品をかえての食い下がりです。

と、源氏の君は、女三の宮のお母様は、と言いながら、

この御子の御母女御こそは、かの宮の御姉妹はらからにものし給ひけめ。容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれ給ひし人なりしかば、何方いすかたにつけても、この姫宮おしなべての際には、よもおはせじを。

「女三の宮のお母様藤壺女御は、先代藤壺の宮の腹違いの妹君でいらっしゃる。しかも藤壺の宮に次ぐ美人とも聞いている。してみると女三の宮は、さぞかし美しかろう」と、胸の中にふとお顔を見たいという興味が動いたのです。

源氏の君が幼き日から追い求め、あこがれつづけた理想の女性、彼にとっては永遠の女性であった藤壺の宮。彼女はすでになき人でありながら、まだ彼の心の中には生きつづけているのです。藤壺の宮の妹君のお子、姪というだけで源氏の君の心は平静ではないように見えるのです。藤壺の姪紫の上を発見し、ひどく感動した北山での若き日の思い出が、今また新しく彼の心をゆさぶります。老齢に達し、夢よもう一度のあやしい執着の灯がともったとて不思議はありません。さらにまた初老を迎える自分に最愛の若き姫君を……そぞろ心動くものがあります。さあ



問題はどう展開するでしょう。

一方太政大臣（頭中將）の長男柏木衛門督の求婚は切実です。父を通じて、たびたび意思表示をするのですが、朱雀院からはいっこうに反応はありません。柏木は子どものときから皇女三の宮をこそ妻に、とあこがれているのです。さきの夕霧といい、この柏木といい、第二世代の結婚観は源氏、頭中將における第一世代とおのずから異なるものがかえらるのです。

年は押しつまって、来年こそは女三の宮の結婚を期待しておられる上皇は、いよいよ裳着の儀式をしようとして、裳の腰結こしゆいの役を太政大臣に頼みました。長男柏木の縁組みをとり上

げてくださらないのでと気の進まない彼も、上皇の仰せとならばやむを得ず、裳着の儀式は実に盛大に行なわれました。

少々ご偏愛の上皇様は、めばしい財産をほとんどこの姫君にお譲りになります。そのうえこんどの裳着も日本製の布や調度は用いず、舶来品ばかりでした。

姫君へのお祝い品の中に、中宮からのりっぱな装束、お櫛箱などが目立って美しいでした。中宮が梅壺女御として参内なさるとき、当時の帝朱雀の君からお祝い品として贈られたお髪上げの道具を、今風の趣味につくり直してさしあげるのです。

中宮にもなった幸福にあやかるよう、さいさきを祝っての心をこめたものでしたから、お手紙にも、

さしながらむかしを今につたふれば玉のをぐしぞ神さびにける  
とあります。かつてこの君の美しさに心ひかれ、ご所望があったほどの院は、優美な水葦のあとゆかしい趣味の贈り物を見るにつけ、若かりし日、全盛の日をいまさらのように思い出されるのでした。院からのお礼状には、

さしつぎに見るものにもが万世をつげのをぐしの神さぶるまで  
女三の宮もあなたのように末久しく栄えますよう、とあったのでした。

たいへんな宴会が繰り広げられ、裳着の披露はすみました。ご安心なさった朱雀院は、それから三日目に剃髪して、入道なさいました。姫の結婚のきまりしだい、西山のお寺へ移るおつもりです。

思いきって出家なさいましたが、朧月夜の君の悲嘆を慰めかねて、

「夫婦の愛情は親子の愛などくらべられないものですから、あなたとの別れのせつなさは、私も同じです」と、現世に引き戻されそうな恩愛のきずなを感じるのです。女三の宮と朧月夜の君を思うと、わが精進の心もゆるみそうな朱雀院でした。御用を勤めた僧たちでさえ、涙を押えかねるあわれさ。まして皇女、女御、更衣、多くの侍女のすすり泣きの声は上皇御所に満ち、しずかなるべき御心もあわただしさに乱れがちでした。

ご出家後、朱雀院はご気分もよろしいようです。源氏の君は、ご出家についてのごあいさつやら、お見舞いやらを兼ねて、久々で上皇御所をご訪問になりました。上皇のお喜びは、格別でした。

女三の宮の縁談を一応はお断りになった源氏の君ですが、口上はお見舞いにしろ、おいでになれば、せんだっての交渉の話が出ないはずはありません。それくらいのことを聡明な源氏の君がわからぬはずはないのです。しかも朱雀院の心を明け暮れ悩ましている問題が女三の宮の縁組みですから、それらを知っているならお見舞いに見えたのであれば、このご縁は八分どりの可能性が見えたと、上皇がお喜びになるのは当然でしょう。苦しいのをがまんしてお床に起き、源氏を御簾の中へお通しなさいました。

源氏の君はお目にかかる感慨無量です。すぐには言葉も出ないのです。

「桐壺帝がなくなられたところから、私は出家の志を持っておりましたのに、あちらこちらのほだしに引かれて、心弱くも今日までぐずぐずしておりますが、ご出家なさったあなた様をうらやましいと思っております」と、しみじみとお話しになりますと、院は、

「私は病気がちでしたから、早く出家したいと思いながら、こんなぎりぎりになってしまいま